

原子力規制委員会記者会見録

- 日時：平成29年7月5日（水）14：00～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：田中委員長 他

<質疑応答>

○司会 それでは、お伝えしていた時間になりましたので、ただいまから原子力規制委員会の定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いします。

それでは、質問のある方は手を挙げてください。イシヅカさん。

○記者 朝日新聞のイシヅカと申します。

東海再処理の件でお伺いします。先日、規制委員会の方に、70年間で約1兆円という廃止計画の申請があったと思うのですが、その期間と費用についての所感があればお願いしたいのですが。

○田中委員長 期間については、答えは急にはできませんけれども、いずれにしても相当長期間かかるとお思いますので、差し迫ったリスクを優先的に下げていくということから始めるべきだと思います。ですから、プルトニウム溶液の処理は一応、済んだのですが、高レベル廃液のガラス固化のあれがまだ残っていますね。ですから、そのあたりまでやるのが一番優先的にとにかくやるということで、これは廃止措置計画が出る前から、一応、そういうことをやらせてきたということですが、今度、正式に廃止措置が出てきましたから、それについてもきちっと規制委員会、規制庁としてはウォッチしながら、安全が損なわれないようにやっていく必要があると思います。と同時に、やはり研究所廃棄物をどうするのかということも原子力機構の法律上位置づけられたミッションですから、そこのところもきちっとやっていかないと、廃止措置が全然進まなくなってくると、できなくなるという懸念はしています。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほかにございますでしょうか。ヨシノさん。

○記者 テレビ朝日、ヨシノです。

柏崎刈羽の審査も最終盤を迎えていまして、いよいよ来週月曜日に東電のトップとお会いになりますが、改めましてどのようなことを確認したいかということをお聞かせください。

○田中委員長 最終盤というほどまで来ているかどうかは、更田委員会の方も、ある程度整理をされてきているというのは見ていますけれども、まだだだと思います。

それから、10日は基本的なところを、新しい経営陣に原子力事業者としての基本的な姿勢をまずお尋ねすることになるのだと思います。当然、1Fの廃止措置と非常に関係することですから、そういうことも含めてだと思えます。

あと、もう一つ言えば、先日、廣瀬社長に来ていただいて話をしたところの再確認みたいな話はあるかと思えます。

○記者 ありがとうございます。

○司会 それでは、ミウラさん。

○記者 読売新聞のミウラといいます。

今日の午前中の会合でもお話出ていました大洗の被ばく事故の関係ですが、JAEAのトップマネジメントの問題を委員長も指摘されていましたが、理事長を近々招いて、安全に対する姿勢、取組を問いただすと、そういうことでよろしいでしょうか。

○田中委員長 今、何か具体的なあれを持って言ったわけではなくて、基本的に廃止段階にあるとしても、安全上、手を抜いていいということは全くありませんのでね。逆に言うと、廃止という非定常の仕事をするときの方がリスクが大きいわけですね、いろいろな意味で。そういうことをきちっとマネージしていくというのはやはりトップの責任だし、セーフティカルチャーの原点ですから、そういうところを申し上げたのです。呼ぶとも呼ばないとも、今、何も決めているわけではないですね。

○記者 あと、必要なものが足りていない、例えば、資金面であるとか、人材面であるとか、そういったところの手当てについては、どのように考えていますでしょうか。

○田中委員長 私は原子力機構は人が足りないとか、そんなことではないと思えます。やはり経営上の問題が余りにもあるのだと思えます。いろいろな仕事をしているのは分かりますけれども、率直に申し上げて、我々から見ても、なかなかありがたみを感じられないような組織になっているところがありますね。安全の部分を除くと、ほとんどそういうところになってきているので、本当にそういう状況でよろしいのでしょうかというのはありますけれどもね。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほかにございますでしょうか。ドイさん。

○記者 電気新聞のドイと申します。

週末の8日で新規規制基準の施行から丸4年を迎えると思うのですがけれども、この時期におそらく毎年、委員長は聞かれていることかもしれないのですがけれども、これまでの審査の進め方とか合理性について、どのような御所感をお持ちかというのを改めてお聞かせいただきたいと思うのですがけれども。

○田中委員長 余りこういうところで答えることではなさそうだからね。インタビューみたいだ。5年いろいろな経過をたどってやってきて、今、発電所でいえば5基が動き出

しているということですね。私どもとしては、やはり1Fの反省を踏まえて、きちんと安全確保にある程度我々としての自信が持てないようなものについては、許可は出せないということで取り組んでいます。そのいい悪いという判断はいろいろな判断があろうかと思えますけれども、私どもとしてはそういう姿勢で臨んできましたということでしょうかね。

○司会 ほかにございますでしょうか。今、お1人の手が挙がっていますけれども。お2人ですね。では、今のお2人を最後といたしたいと思います。ナガノさんから。

○記者 新潟日報のナガノと申します。

先ほども出ましたけれども、柏崎刈羽の審査の今後の進め方なのですけれども、先ほども御発言がありましたが、10日に新しい東京電力の経営陣とお会いして、そのほか、田中委員長は、柏崎刈羽の現場の方の方と実際に行かれて意見交換をするというような予定もあるかと思えますけれども、このあたり、10日を経てどのぐらいのタイミングで、すぐ行くのかとか、そういう見通しと、あと、具体的に改めてどういったことを聞きたいかというところを教えてください。

○田中委員長 10日の会合と現場に行くというのは、必ずしも一体ではないと思います。現場で確認するというのは、要するに、何か事が起きた場合とか、安全の基本的な確保というのは、やはり現場の力による考え方。だから、そういう1F事故を経験した東京電力が、どういうふうな姿勢で、どういうふうなカルチャーが育っているかというのを確認するという意味ですね、技術の面でもそうですけれども。

その結果、どういう判断になるかはまだ何も分からないのです、先ほどの御質問もありましたように。だから、この柏崎刈羽の審査が最終段階かどうか分からない。ただ、私が行くのは、審査の一つというよりは、やはり特別ですね、東京電力の場合には。そのことについて私自身がきちんと納得できないようだったら、許可はできないというふうに私自身は思っていますので、そこがきちんと納得できる状況にあるのかどうかということを確認するということになろうかと思えます。

○記者 関連で、この先もし予定があれば、いつごろ現場に行きたいかというのは、何か今はありますでしょうか。

○田中委員長 いつというのは、今はまだ申し上げられるようなことではないですね。私自身も何となく今は忙しいし、相手の御都合もあるでしょうから。

○記者 ありがとうございます。

○司会 それでは、最後に、後ろの方。

○記者 新潟のテレビ局のテレビ新潟のヤナイといいます、柏崎刈羽の関係で、地元の地質学者の調査で活断層が12万年前ごろにできたものではないかという調査結果を出していて、田中委員長宛てに質問書も出しているかと思うのですが、この地元の調査の

受けとめと質問への回答とか、お考えがあれば教えてください。

○田中委員長 柏崎刈羽については、そういうことも含めて、今、審査中だと私は理解しているのですけれども、細かいことはそちらから教えてください。

○司会 補足があれば、内藤さんの方から。

○内藤原子力規制部審査グループ（地震・津波審査部門）安全管理調査官 地震・津波審査部門の内藤といいます。

今年の5月ぐらいに出された地元の専門家の方々の要望書の件だと思いますけれども、この内容については、我々の方でも中身は読んでいますし、ただ、活断層の年代のことを言われているわけではなくて、地層の中に含まれているテフラという火山灰の年代について、東京電力と違う見解を示されているということですが、この内容自体については、活断層の活動性については影響がないものだというふうに判断をしております。現時点で大きな論点はないと考えています。

○記者 では、1つ、田中委員長としては、柏崎刈羽には今のところ活断層はないという認識でよろしかったでしょうか。

○田中委員長 私の認識というよりは、審査をしている石渡さんをはじめとした、そういうところで判断をしているということで、その判断に対して私が何か異論を持っているということはありません。

○司会 それでは、本日の会見は以上としたいと思います。お疲れさまでした。

—了—